

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究

—教師の資質能力を高める授業評価方法の検討—

姉崎 弘・遠藤浩之(常葉大学保健医療学部)

要旨：スヌーズレンの授業(スヌーズレン教育)に関しては、これまで事例研究や調査研究がいくつか報告されているが、その授業評価方法については十分に検討されていない。そこで本稿では、肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業を取り上げて、事例児の実態把握から、月に1回程度研究授業を実施し、授業の評価とスーパーバイザー(SV1とSV2の2名)も入った授業検討会を実施して継続的に授業の改善を図ると共に教師の資質能力の向上を試みた。研究を実施するために、新たにアセスメントシートを開発すると共に、毎回の事例児側と担当教師側の授業評価用紙や年度末の指導の振り返りシートを試作し、最後に、研究に従事した教師たちと2名のSVが参加して、今回のスヌーズレンの授業評価の方法を振り返って意見交換を行った。これらの取組みを通して、スヌーズレンの授業改善に向けた授業評価方法について考察した。

キーワード：重度・重複障害児，スヌーズレン教育，アセスメントシート，授業評価方法，教師の資質能力の向上

1. はじめに

わが国におけるスヌーズレンの授業は、1990年代から肢体不自由特別支援学校で始められた。スヌーズレンの授業に関する研究としては、姉崎(2003)が日本重症心身障害学会誌に発表した「重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について—肢体不自由特別支援学校の自立活動の指導に適用して—」の論文が最初であると考えられる。この論文では、肢体不自由養護学校の重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業を実践し、教師たちに観察された生徒たちの行動評価を基に、反応のタイプを分類し、スヌーズレンの授業の教育的効果を明らかにした。その後、藤澤・姉崎(2017)、木村・安井(2019)等の論文がいくつか報告されている。

しかしながら、スヌーズレンの授業を作っていくための児童生徒の集団の実態把握から授業実践と評価、さらに授業改善に至るまでの一連の流れに関する、いわゆるスヌーズレンの授業評価方法に関しては、これまで十分に検討されていないのが現状である。しかし授業の改善を図る上で授業評価は必要不可欠な取組みである。

そこで本稿では、肢体不自由特別支援学校に在籍する重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業(スヌーズレン教育)を取上げて、教師たちと2名の研究者(SV1とSV2)で、教師の資質能力の向上につながる授業評価方法を開発し検討したので報告する。

2. 方法

(1) 対象授業・場所・期間

A 肢体不自由特別支援学校小学部・自立活動を主とした類型の児童5名と担当教師5名

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ―教師の資質能力を高める授業評価方法の検討―

の集団によるスヌーズレンの授業で、同校に設置されているスヌーズレンルームで、月 1 回程度研究授業(主に前半は集団指導、後半は個別指導)を実施した(全 8 回)。期間は 201X 年 4 月～201Y 年 2 月である。本研究では児童 5 名の内 3 名を事例児とした。

(2)研究方法

- 1) 主授業者が毎回スヌーズレンの授業の指導略案を用意し、研究者が感覚面等に関する①「アセスメントシート」、②授業評価の記録用紙(児童側の「行動評価表」と教師側の「指導評価表」)、③年度末の「授業研修の振り返りシート」の各書式を試作した。
- 2) 月 1 回程度、スーパーバイザー(SV1)が学校訪問した際に、スヌーズレンの研究授業を実施し、授業を VTR 録画した。ただし、SV2 は 1 回のみの参加であった。授業後、比較的短時間内に児童 5 名の内、事例児 3 名の指導について、各担当者が指導を振り返って評価表に結果を記入した(事例児側と教師側の評価)。当日の放課後に、授業担当者と SV1 が参加して授業検討会(約 80 分間)を実施し、SV1 が司会を担当した。内容は、今日の授業の反省、授業 VTR の部分的視聴(約 20 分間)、事例児のあらわれと指導のあり方についての意見交換、SV1 への質問等であった。SV1 と SV2 は現場の実践経験を有し、スヌーズレンの指導に造詣のある大学教員である。
- 3) 後日、VTR 画面を基に、SV1 と SV2 が指導を評価して、次回の指導の参考になるコメントを主授業者にメールで送付を行い、主授業者が各担当教師にそれを伝えた。
- 4) 最後に、本研究に従事した主授業者と事例担当教師 1 名、学部主事、指導教諭、SV1 と SV2 の 6 名で、今回の授業評価方法について意見交換を行った(ただし、担当教師 2 名は都合で欠席であった)。

3. 結果

(1) 今回開発したアセスメントシート・授業評価表・振り返りシートの各書式と記入例

①スヌーズレン教育の個別アセスメントシートの書式(記入例)(一部内容を改変)

<人との関わりと感覚面の実態・目標(個別)>		
項 目	実 態	指導目標(願い・ニーズ)
人との関わり	主体的な関わりが見られることは限りなく少ないが、人の表情を見続ける	
視覚	人を見ることは多いが、物に注目することや、見続けることが難しい。 適宜眼鏡をかけるが常時着用はしていない。	提示された物を注視したり、追視したりすることができてほしい。
聴覚	特に敏感な反応や鈍感な反応は見られない。	
触覚	特に敏感な反応や鈍感な反応は見られない。	
嗅覚	特に敏感な反応や鈍感な反応は見られない。	
味覚	特に敏感な反応や鈍感な反応は見られない。 甘い物が苦手	
前庭感覚	まれにロッキングのような動きをすることがある。	
固有受容覚	手もみや机を叩くことがある。	

・ わからない所は未記入にする。 ・ 「個別の指導計画」とリンクさせる。

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ー教師の資質能力を高める授業評価方法の検討ー



＜個々の児童のスヌーズレンの授業の全体目標＞

- ・物を押したり、掴んだりすることができる。
- ・様々な物に興味関心を持ち、注視や追視をしたり、変化に気付いたりすることができる。

*集団の授業では、個々のアセスメントシートを集めて分析し、授業全体の目標・内容を設定する。

＜個々のスヌーズレンの環境設定と指導者の関わり方のポイント＞

スヌーズレン環境の設定	指導者の関わり方の基本的な押さえ	配慮事項
集団：ブラックライトに反応して光る教材を用いて注視や追視を促す。 個別：バブルチューブやサイドグロウ等の光る教材に近づく。	対象児と教員の間で物を提示した際に、物越しに教員を見ていることがあるため、提示物を動かす等をして正しく注視しているかどうかを確認する必要がある。	急に覚醒が低下し入眠することがあるため、周囲に頭部をぶつけないように注意する。

児童・生徒氏名 H 児 学部・学年・類型 小学部 2 学年 自立活動を主とした類型
 性別 ☒ 男 ・ 女 担当教師名 ____T____ 記入日 ○ 年 △ 月

＜個々の児童の領域別の実態把握シート＞

＜人との関わり＞

	1 回目 年 月 9 月まで	2 回目 年 月
本人の好む関わり方	・ ふれあい遊びや知っている歌を歌う。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	・ 膝の屈曲が苦手である。 ・ 覚醒度が急に落ちることがある。	

＜視 覚＞

	1 回目 年 月	2 回目 年 月
本人の好む刺激と刺激の提示の仕方	・ 瞬間的に注視している様子が見られる。 ・ 絵本はよく見る。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	・ 3 メートルほど離れた物を見るときは眼鏡を使用する。 ・ 特になし。	

＜聴 覚＞

	1 回目 年 月	2 回目 年 月
本人の好む刺激と刺激の提示の仕方	・ 「おかあさんといっしょ」に出てくる歌が好き。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	・ 特になし。	

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ―教師の資質能力を高める授業評価方法の検討―

<触 覚>		
	1 回目 年 月	2 回目 年 月
本人の好む刺激と刺激の提示の仕方	・ 特になし。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	手もみや座位保持の机を叩くことがある。	

<前庭感覚・固有受容覚>		
	1 回目 年 月	2 回目 年 月
本人の好む刺激と刺激の提示の仕方	・ 特になし。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	・ 右手を強く握り込む癖があり、手にタコがある。 ・ 立ち直ることができる。 ・ たまにロッキングのような動きをすることがある。	

<嗅覚・味覚>		
	1 回目 年 月	2 回目 年 月
本人の好む刺激と刺激の提示の仕方	・ 特になし。	
配慮事項 (不快な関わり方等)	・ 甘い物は苦手。 ・ 香りの教室（特別授業）で、数種類のアロマオイルの内「オレンジ」のみ嫌がらなかった。	

図 1 スヌーズレン教育の個別アセスメントシート (姉崎, 2019 pp.206-210 一部改変)

対象とする個々の児童について「人との関わりと感覚面の実態把握」から指導目標を設定し、そこから「個々の児童のスヌーズレンの授業の全体目標」の立案、さらに個々の児童のスヌーズレンの環境設定と指導者の関わり方のポイントを整理し、指導のあり方を明確にした。また「個々の児童の領域別の実態把握シート」に、「本人の好む刺激と刺激の提示の仕方」・「配慮事項・不快な関わり方等」を記入して、児童が不快と感じる刺激や環境をできるだけ排除するように心がけた。スヌーズレンの創始者たちの考えによると、スヌーズレン環境では利用者(児童)が不快と感じる刺激を避けることが基本とされている(姉崎, 2019)。

② 授業評価の記録用紙(授業評価表)の書式(記入例)(一部内容を改変)

<事例児の当日の体調・前時の様子>		日付 _____ 担当教師名(T)
事例児	今日の体調	前時(3 時限)の様子
H	◎ ○ 特に変わらない ▲	ウトウトする様子が見られた

*今日の体調は、◎よい、○特に変わらない、▲あまりよくない、をそれぞれ表す。

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ―教師の資質能力を高める授業評価方法の検討―

<スヌーズレンの授業における事例児側の行動評価表(改訂版)>

観察された行動カテゴリー・集団指導と個別指導の別・指導目標			主な機能レベル	具体的な記入
視線	集団	3(落ちてくるイチョウを見る) 2 1	3 ② 1	イチョウは見ていたが，落ちてくるイチョウを見ることは難しそうであった。
	個別	3 2 1	3 2 1	
表情	集団	3 2 1	3 2 1	
	個別	3 2 1	3 2 1	
発声	集団	3 2 1	3 2 1	
	個別	3 2 1	3 2 1	
動作・しぐさ	集団	3 2 1	3 2 1	
	個別	3 2 1	3 2 1	
備考欄(行動特徴・評価の困難など)				

*事例児側の数量評価は、「2」：普通の反応、「3」：高い反応、「1」：低い反応、をそれぞれ表す。

*指導目標として設定した項目のみを記入するようにした。

<事例児担当教師側の指導評価(教師自身の内省評価)表>

カテゴリー	レベル	具体的な記入
教師のポジショニング・介助の仕方	3 ② 1	スイッチやイチョウにアプローチできるように心がけた。
教師の事例児への声かけの仕方	3 ② 1	もう少し声かけが多くても良かったかなと思う。
事例児の反応に対する教師の応答の仕方	3 ② 1	反応に対して上手く応答できていなかった。
教材・教具の配置と提示の仕方	3 ② 1	できるだけ、本児の視野に入れたり、耳元で鳴らしたり、匂いを嗅げるようにした。
備考欄 (授業全体について気が付いた事)		

*教師側の数量評価は、「2」：普通の指導、「3」：良い指導、「1」：あまり良くない指導、をそれぞれ表す。

図 2 毎回の授業評価表(事例児側と担当教師側)

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ー教師の資質能力を高める授業評価方法の検討ー

図 2 の事例児側の行動評価表(改訂版)は、姉崎・岡部(1989)が言語治療場面のケース検討会の分析で開発した評価システムを参考に新たに開発した書式である。観察された事例児の行動を「視線」「表情」「発声」「動作(しぐさ)」の 4 つのカテゴリーで評価し、数量評価は「3」「2」「1」の 3 段階の機能レベルで評価した。事例児担当教師側についても、教師自身の内省評価を数量評価を用いて「3」「2」「1」の 3 段階の機能レベルで評価した。

図 2 の事例児側の行動評価表は、担当教師たちが授業展開の構成の仕方に則して、年度の途中で修正して改訂したものである。授業の前半の集団指導と後半の個別指導について、個々の事例児に観察された行動カテゴリー、集団指導か個別指導かの別、指導目標をそれぞれ記入できる書式に修正した。

③授業研修の振り返りシート(記入例)

表 1 スヌーズレン教育における授業研修の振り返りシート (一部内容を改変)

<事例児について>		No.1
事例児 H 児	担当教師名(T)	
①事例児の各指導目標(目標が年度途中で変わった場合、それぞれの目標を書いて下さい。) (これまでに設定した目標) ・光るボールを 1 回注目することができる。 ・光るスカーフを 5 秒間持つことができる。 ・バブルチューブを集中して 1 分間見ることができる。 ・バブルチューブの中の玩具を 1 回見ることができる。 ・光る紙を活動中に 2 回以上見ることができる。 ・教員の顔が光る仮面の顔に変わったことに気づき、見ることができる。 ・落ちてくるイチョウの葉を見ることができる。 ・ブラックパネルシアターの絵人形(6 種類)の登場人物をそれぞれ 1 回見ることができる。 ・光る、落ちてくる雪を 1 回以上見ることができる。 ・冷えピタを貼られたことに気づく。(表情を変える等) ・光る、落ちてくる雪を 10 秒集中して見ることができる。 ・足浴をしてリラックスし、表情を変える。 ・手浴をしたときにリラックスし、手を広げることができる。		
②事例児の主なあらわれ (主に 5 月・6 月・7 月・9 月分) <数値(1・2・3)の変容からわかること> ・ほぼ 3 (できた) が付いていることから、覚醒状態がよい状態で活動することができ、その授業の目標も達成することができていた。 (主に 10 月～3 月分) <数値の変容からわかること> ・5 月・6 月・7 月・9 月分の変容からわかることとほぼ同じであった。	(目標ごとに分けて書いて下さい。) <自由記述内容の変容からわかること> ・前の時間の様子からだんだん寝る回数が減ってきている。 ・注視はコンスタントにすることができている。 ・追視はまだ難しい。ただし、少しずつできるようになってきているのではなく、本人のコンディションやそのときの提示の仕方によると考える。 <自由記述内容の変容からわかること> ・活動内容によるのか、表情がニコッとするが増えている。	

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
 ―教師の資質能力を高める授業評価方法の検討―

<担当教師について（自分自身の指導を振り返って）>		No.2
事例児	H 児	担当教師名(T)
①担当教師の気付きや工夫・配慮した点、効果的な指導・支援 (主に 5 月・6 月・7 月・9 月分) ・その都度、こうした方が本児にとってより良いのではないかとすることを重視して支援した。 ・前回の授業検討会で受けた指導・助言を踏まえて指導した。 (主に 10 月・11 月・12 月・2 月・3 月分) ・授業検討会やその後の話し合い、普段の授業の様子から適切であると思われる支援をした。 ・その都度、こうした方が本児にとってより良いのではないかとすることを重視して支援するだけでなく、自立活動の目標をより意識して支援するようになった。		
②自立活動の指導の中での位置づけや押さえ これまでの授業検討会で提出した自立活動とスヌーズレンの目標の全体図で位置づけている。		
③担当教師自身の反省点・今後の課題や方向性 評価シートを見直したときに具体的に書けている時とそうでない時があり、振り返る際に参考にしにくいことがあった。しかし、ビデオがあることで再確認することができた。 授業検討会前は、時間が少なく落ち着いて整理できないまま向かうことに不甲斐なさを感じていた。検討会中は、踏みとどまって考えることが難しかったために、上手く伝えられなかったり、聞き取れなかったりして、自分が聞きたいと思う助言が得られていないと感じることがあった。 以上を踏まえ、検討会中にビデオを流しているときに、ポイントで止めて SV が解説したり、SV に助言を仰いだりすることが整理するために必要であり今後の課題であると考えた。 最後に、スヌーズレンにおいて、重度・重複児の主体性を重視するなどの学習の基盤あるいは芽生えを育む段階から、次の段階を主体的に学べるように工夫するとなると、スヌーズレンの環境が児童によっては、その活動に制限をかけている面も感じて難しいと思われた。		

(2) 事後の「スヌーズレンの授業評価方法についての意見交換」で出された意見

表 2 教師と SV による「スヌーズレンの授業評価方法」に関する意見交換の主な内容

<ul style="list-style-type: none"> ・集団による授業であったため、個々の目標にどのようにして迫るか、難しさを感じた。 ・今までスヌーズレンの授業の指導略案を書いたことがなかったので大変勉強になった。 ・今回の集団による授業では、事例児の反応を引出すことを主な目標にして指導を行ったが、事例児の中にはリラックスを必要とする児童もいた。個々のニーズに応えるためには、反応を引出す指導とリラクゼーションを促す指導が必要だが、40 分間の授業の中では時間が足りないと感じた。 ・スヌーズレンの授業の進め方について、繰り返し行うことで少しずつわかってきたところがある。 ・研究として取組んだこともあり授業検討会のない日に教師間で授業の VTR を見て振り返りができた。 ・今回 SV がいて、授業検討会で教師たちの質問に答えたり、適宜助言をしていただけた。SV がいないと、教師だけではわからないことが多々あり、戸惑うことが多かったと思う。 ・今後同じような目標の児童たちでグループをつくり授業をした方が、授業をしやすくなった。

4. 考察

姉崎(2013)は日本特殊教育学会誌の「特殊教育学研究」の中で、多重感覚環境であるスヌーズレンを活用した授業を新たに「スヌーズレン教育」と命名して定義した。そしてスヌーズレン教育をわが国の自立活動の新たな教育法(指導法)として位置付けている。

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
—教師の資質能力を高める授業評価方法の検討—

今回、授業評価に向けて、重度・重複障害児用の「スヌーズレン教育のアセスメントシート」の記入例」を新たに開発し、スヌーズレンの授業における各事例児の感覚ごとの実態と目標、そこからスヌーズレンの集団による授業の全体目標を設定して、スヌーズレン環境の設定と指導者の関わり方のポイントを整理したこと、さらに「人との関わり」や「感覚ごとの本人の好む刺激と刺激の提示の仕方」や「配慮事項(不快な関わり方等)」に関する内容を整理したことで、スヌーズレンの授業を集団で実施する場合にも、事例児個々のニーズに応じて授業を展開しやすくしたことは本研究の主な成果であったと考えられる。

姉崎(2020)の先行研究では、スヌーズレンの授業に関する全国の肢体不自由特別支援学校を対象とした5年間にわたる聞き取り調査では、何らかの指導記録を付けている学校がほとんどであったが、多くの学校が授業の指導略案または指導案を作成しておらず、授業評価や授業検討会も実施していなかった。したがって、この事実から、多くの学校では授業評価に関する書式がほとんど作成されていない状況の中で授業実践を積み重ねていることが推測された。この結果から、全国的に見て、スヌーズレンの授業評価に基づいて授業の改善を図る実践がほとんどなされていないのが現状であるといえる。しかしこれでは、より良いスヌーズレンの授業を創造していくことは難しいと考える。学校では、研究の窓口になっている特定の教科や領域の授業に限って、毎回丁寧な記録を残して評価や改善を図っていると考えられるが、それ以外の教科・領域等の授業については、時間的な制約もあり、指導記録や授業評価を生かした実践がなされにくいのではないかと推測される。

また毎回の授業における「授業評価表」は、今回、事例児側だけではなく、担当教師側についても、自由記述による評価の他に、教師が比較的付けやすい3件法による数量的評価を導入し、授業全体をより客観的に内省評価ができるように工夫した。特に、教師自身による継続的な自己評価の取組みは、個々の教師の資質能力を向上させていく上で不可欠な研修となっている。一般に、重度・重複障害児の授業評価は、児童の反応が乏しいことが多く、行動観察自体が困難になる場合が多々見られる。そのため数量評価が難しく、自由記述による評価が主になりやすい。そこで、今回事例児側のみならず教師側の評価も導入して両者の評価から総合的な評価を行ったことは意義がある。それはこれまで教師側の評価はあまりなされてこなかったためである。他方、橋本(2019)はスヌーズレン中の人の脳波測定による客観的な数量評価を試みており、今後授業場面への適用が期待される。

本研究では、姉崎(2002)の先行研究の成果を踏まえて、授業を科学的に評価するというよりも、今日学校現場で求められている、普段の授業をどのような方法を用いたら、よりの確に、より容易に評価ができて、なおかつ授業改善につなげることができるかを、試行錯誤しながら実践を通じて検証した。ここでは、授業の評価を厳密に行うことよりも、教師の普段の教育活動の中で導入することが可能で、かつ有効だと考えられる授業評価の方法を探ることに重点を置いた。今回の研究では、教師各自による授業評価とそれに基づく集団による授業の改善の取組みを通じて、教師一人一人の指導力量の向上を目指した。

したがって、本研究では、事例児のアセスメントシートと授業の指導略案の作成から授業づくりを行い、事例児と担当教師の授業評価だけに終わらせず、この後に授業検討会を実施して、授業を行う個々の教師自身の事例児の実態把握力や指導観、授業観等の育成という、教師として成長するための総合的な力量を向上させる取組みを行った。この成果の一部は、経験の浅い若い教師を事例にその成長過程を分析し考察した(姉崎ら、2020)。

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
—教師の資質能力を高める授業評価方法の検討—

年度末に各担当教師に依頼して記入いただいた「授業研修の振り返りシート」は、事例児を担当する各教師が自身の指導を振り返っての考察とまとめであり、貴重な研修資料になっている。授業実践をやりっぱなしにしないで、授業中の教師の気づきを記録に残し考察を深める教育活動は、次のより良い授業をつくることにつながり、教師になくてはならない取り組みである。今日評価した記録を次の授業に生かしていく実践がまさに求められている。

本研究の「アセスメントシート」「授業評価表」「振り返りシート」の一連の書式の活用は、教師の「児童を見る確かな目」を養う上で大切なツールになっていたと考えられる。教師が自ら実践している授業を、書式上に視覚的に見て客観化させる作業は、授業を振り返り、反省し、授業改善につながるヒントを提供してくれる。本研究の最後に、教師とSVで実施した「スヌーズレンの授業評価方法についての意見交換」では、今回の授業評価に関する実践研究の振り返りを行い、①集団指導の中で個のニーズに応じていくには難しさがあり、集団と個別の指導をどのように組み合わせたらよいか、②同じような指導目標(例えば、「リラクゼーションを促す授業」や「反応を引き出し高める授業」)の児童たちでそれぞれ学習集団を編制し、児童たちに共通する目標で授業を行うことで、より効果的な授業になるのではないか、③繰り返しスヌーズレンの授業を行うことで、教師の授業理解が深まっていった、④授業検討会で定期的にSVから指導助言を受ける必要がある等、といった意見が出された。

研究に従事した教師たちは、SVの指導助言を受けて、年度の中頃に、個々の事例児の実態から自立活動の目標を設定し、さらに個々の自立活動の目標から集団によるスヌーズレンの全体目標を設定し、そこから毎回のスヌーズレンの授業の全体目標や個々の授業目標を設定する、といった一連の流れで、事例児ごとに視覚的に見てわかりやすい「指導の系統図」を作成した。この教師たちの貴重な取り組みは教師自身の教育活動を視覚的に明確化することができ、本研究の成果であったと考えられる。この取り組みは、スヌーズレンの授業に限らず、他教科等の授業を実践する上でも必要不可欠である。この成果から、来年度スヌーズレンの集団による授業を、児童の指導目標ごとにいくつかのグループに分けて実践することで、グループ内の個々の児童のニーズに応じた指導が、よりの確に、より容易になると考えられる。

今回の研究では、教師たちはSVが学校に来ない時も次回の授業改善に向けて自主的に熱心な話合いを持っていたことは評価される。しかしスヌーズレンの授業は多くの教師が不慣れなこともあり、授業検討会では、この授業づくりに関する知識が足りない分、常にSVへの質問や、SVによる指導助言が求められたが、このことは当然の結果であったといえる(姉崎, 2020)。今後は、SVが授業検討会に同席していなくても、教師たちが普段の授業づくりの中で、自分たちの力で研修や研究を進めていく必要がある。教師は常に、より良い授業を実践してその効果を検証することが求められる。さらに、今回の研究でお互いに学んだことを全校の教師たちにも伝達して、その成果と課題を教師間で共有しながら教師集団が一丸となって授業力を高め合う研修が求められる。学校ではこのような教師間のチーム力が正に問われている。藤澤・姉崎(2017)は、授業を数量的に分析する評価を試みている。確かに授業を数量化して数値として客観的に理解することは大切であるが、それが最終目的ではなく、あくまでも客観的な授業理解を通じて、教師の児童や授業を見る目を養い、教師間の研修意識やチーム力を高め、より良い授業の創造につなげることが目指されねばならない。すなわち、授業を評価するとは、個々の児童の成長・発達を願って、少しでもより良い授業を創意工夫しようとする、教師の主體的な研修姿勢の形成に資するものでなければならないと考える。

重度・重複障害児のスヌーズレンの授業における評価方法に関する研究
—教師の資質能力を高める授業評価方法の検討—

5. 今後の課題

第一に、スヌーズレンの集団による授業の場合、適切な学習グループを編制することは極めて重要である。児童一人一人の目標から学習グループをつくり、共通する指導目標で授業を行う取組みが効果的であるかどうかを、実践を通して検証していく必要がある。

第二に、スヌーズレンの授業を自信を持って実践することのできる力量のある教師の育成は今日全国的な喫緊の課題である。今後、スヌーズレン教育担当教師の力量を高められる研修プログラムを開発し、授業研究を通じて、その有効性を検証していく必要がある。

6. 文献

- 1) 姉崎 弘・岡部克己(1989) 言語治療におけるケース会議用検査バッテリーの開発と有効性の検討について. 心身障害学研究, 13(2), 33-48.
- 2) 姉崎 弘(2002) 養護学校教師の指導技能を高める研修方法の開発と有効性の検討. 特殊教育学研究, 40(3), 303-311.
- 3) 姉崎 弘(2003) 重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について—肢体不自由特別支援学校の自立活動の指導に適用して—. 日本重症心身障害学会誌, 28(1), 93-98.
- 4) 姉崎 弘(2013) わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究, 51(4), 369-379.
- 5) 藤澤 憲・姉崎 弘(2017) 重度・重複障害児のスヌーズレンの授業実践における数量的分析の試み—手作りのスヌーズレン環境における三項関係に視点を当てて—. スヌーズレン教育・福祉研究, 1, 42-55.
- 6) 姉崎 弘監修/姉崎 弘・高橋真琴・井上和久・桃井克将編著(2019) スヌーズレンの理論と実践方法—スヌーズレン実践入門—. 大学教育出版, 19, 206-210.
- 7) 木村牧生・安井友康(2019) スヌーズレン教育のための ICT 機器の活用について. 北海道教育大学紀要(教育科学編), 70(1), 137-143.
- 8) 橋本 翠(2019) スヌーズレンが生体に及ぼす効果についての生理心理学的検討. 姉崎 弘監修/姉崎 弘・高橋真琴・井上和久・桃井克将編著(2019) スヌーズレンの理論と実践方法—スヌーズレン実践入門—. 大学教育出版, 78-82.所収
- 9) 姉崎 弘(2020)スヌーズレンの授業方法に関する一研究—全国の肢体不自由特別支援学校への聞き取り調査から—. 常葉初等教育研究, 5, 63-76.(印刷中)
- 10) 姉崎 弘・野村和代・遠藤浩之(2020)重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業に関する授業検討会の分析—特別支援学校の経験の浅い若い教師への研修効果の検討—. 常葉大学教育学部紀要, 40, 215-226.(印刷中)

謝辞

本研究にご協力をいただいた肢体不自由特別支援学校の先生方に深謝申し上げます。

付記

本稿は対象児の事例研究とは異なるが、本文中の事例に関する表記は改変を加え倫理面に十分配慮を行い、事前に保護者・関係機関の同意を得ている。また本研究は、2019 年度常葉大学共同研究費および 2019 年度日本教育公務員弘済会本部奨励金の助成を受けた。